

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第 3 回会合 議事概要

1. 開催日時

令和 3 年 12 月 24 日（金）10 時 00 分～12 時 00 分

2. 開催場所

気象庁 7 階会議室 1

※Microsoft Teams による web 会議を併用

3. 出席者

別紙 1 のとおり

4. 概要

下記の議題について検討を行った。

○線状降水帯の予測精度向上に向けた今年度の取組について

- 今年度予定していた取り組みが着実に進められていることが分かり、特に船舶 GNSS による機動観測については、数値予報の改善事例もあったので、今後も期待したい。
- 線状降水帯に限らず災害をもたらすような大雨についても注視していく上で、全体の大雨の事例の中で線状降水帯がどのくらいの割合を占めるのか、どれほど災害をもたらすのかを認識したうえで、関連の議論を進めていくことが重要である。

○線状降水帯の予測精度向上に向けた取組の強化・加速化対策について

- 様々な観測装置やコンピュータが新たに整備され、高解像度のモデルの計算ができることは、とても良いことである。一方、議論を深めるためにも、人材への投資の戦略も重要である。
- 情報の伝え方に関する有識者会合等の議論も参照しながら、線状降水帯発生 30 分前予測がどのような効果をもたらす情報なのかを評価すべきである。
- 新しいプロダクトを開発することは重要だが、過去の予報でその精度が十分ではなかった事例を検証することが重要である。研究者側とも協力する枠組みを作り、

予報と実況の誤差が生じた原因を着実に理解して、モデルや観測の改善につなげるべきである。

○線状降水帯機構解明研究について

- 気象庁の問題意識である4つのポイント（「なぜそこで発生するのか」「なぜ停滞するのか」「なぜ維持させるのか」「いつまで続くのか」）が示されたのは重要である。また、これらポイントは線状降水帯の研究を行う上で考えなくてはならない点である。
- 集中観測には期待が持てる一方で、4つのポイントを解決するために、集中観測で特に何を明らかにしたいのかを整理して、観測の目的を明確にすべきである。
- 集中観測について、得られた知見は様々な方に伝えるべきことであるので、論文や研究報告をまとめるべきである。
- 線状降水帯機構解明に向けて、気象庁と大学等研究機関が、具体的な研究課題や研究の方針、役割分担、研究の進捗報告などを頻繁に議論する場を研究会として早急に設けるべきである。

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第3回会合 出席者

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ 委員

- | | | |
|---|-------------------|--------------------|
| ○ | きとう まさき
佐藤 正樹 | 東京大学大気海洋研究所 教授 |
| | いとう こうすけ
伊藤 耕介 | 琉球大学理学部物質地球科学科 准教授 |
| | いとう じゅんし
伊藤 純至 | 東北大学理学研究科 准教授 |
| | しみず しんご
清水 慎吾 | 防災科学技術研究所 主任研究員 |
| | たかやぶ ゆかり
高藪 縁 | 東京大学大気海洋研究所 教授 |
| | たけみ てつや
竹見 哲也 | 京都大学防災研究所 教授 |
| | つぼき かずひさ
坪木 和久 | 名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授 |
| | よしむら けい
芳村 圭 | 東京大学生産技術研究所 教授 |

(○：主査、敬称略、主査以外は五十音順)

気象庁出席者

- | | |
|--------------------|-------------|
| よこた ひろのぶ
横田 寛伸 | 総務部参事官（技術） |
| いしだ じゅんいち
石田 純一 | 情報基盤部数値予報課長 |
| はせがわ まさき
長谷川 昌樹 | 情報基盤部気象衛星課長 |
| くろら りゅうた
黒良 龍太 | 大気海洋部予報課長 |
| やすだ たまき
安田 珠幾 | 大気海洋部気候情報課長 |
| えいと ひさき
永戸 久喜 | 気象研究所研究調整官 |